

論文内容要旨

経鼻経管栄養チューブの挿入鼻腔側と咽頭内交差の関係について

神奈川歯科大学大学院歯学研究科

全身管理医歯学講座 全身管理高齢者歯科学
田中 洋平

(指導；森本佳成 教授)

論文内容要旨

【背景と目的】経口摂取が困難な場合の短期間の代替栄養法として、経鼻経管栄養法が第一選択となっている。経鼻経管栄養チューブ (NGT) の留置により喉頭侵入・誤嚥、咽頭残留の増加などを引き起こすという報告がある。藤島らは NGT が鼻腔通過側とは反対側の咽頭を通過した場合、喉頭蓋が NGT に接触し、嚥下時に悪影響を及ぼすと報告した。本研究では咽頭内で NGT が交差している患者の頻度および左右差を調査することで、NGT を挿入する鼻腔の左右側が咽頭内交差の頻度に与える影響を明らかにすることを目的とした。また NGT による喉頭蓋との接触頻度や NGT の留置位置を調査し、NGT の咽頭内交差が発生する要因についても検討した。【対象と方法】調査対象は急性期病院に入院中で嚥下内視鏡検査 (VE) を行った NGT 留置患者 118 名とした。NGT が咽頭内でとぐるを巻いている症例は除外した。調査期間は 2014 年 3 月 20 日～2015 年 9 月 14 日とした。診療録から患者の年齢、性別、主疾患を調査した。VE 画像下で NGT の鼻腔通過側と梨状窩通過側が同じ場合を交差なし群、異なる場合を交差あり群とした。また、安静時に NGT が喉頭蓋と接触している場合を接触あり群、ない場合を接触なし群とした。NGT の位置に関して、NGT が安静時の声帯の範囲内に入っていれば正中とし、正中と非正中に分類した。年齢、性別、疾患、挿入鼻腔側、聖隷式摂食・嚥下能力グレードおよび臨床的重症度分類と NGT 交差の関係性を調査した。統計は二項検定、 χ^2 検定、Fisher の直接確率検定およびロジスティック回帰解析を用いた ($P < 0.05$)。本研究は神奈川歯科大学研究倫理委員会 (第 451 番) および独立行政法人 国立病院機構 高崎総合医療センター臨床研究倫理委員会の承認 (H29-8) を得て行った。【結果】NGT の鼻腔通過側では右側 59 例、左側 58 例で差はみられなかった。梨状窩通過側の左右差では左側梨状窩を通過する症例が多かった。NGT 交差の有無は、左側鼻腔から挿入した場合、右側より有意に少ない結果となった (左側 14/42 例、右側 28/42 例; $P=0.009$)。喉頭蓋との接触の有無は NGT 交差ありの場合では 11 例、NGT 交差なしの場合では 0 例であった。NGT の正中の位置では NGT 交差ありの場合では 10 例、NGT 交差なしの場合では 0 例であった。NGT 交差の発生要因としては挿入鼻腔側で有意差がみられた。【考察】食道は解剖学的に正中線よりやや左側を走行しているため、NGT は左側梨状窩を通過しやすいと推測される。NGT 交差により喉頭蓋と接触する可能性や正中に位置する可能性があることから、交差をなくすことにより違和感や誤嚥の軽減につながると考えられる。NGT を左側鼻腔から挿入することで、咽頭内交差を減少させる可能性が示唆された。